Center for Innovation in Traditional Industries Yearbook 2025

Kyoto Seika University

京都精華大学

伝統産業イノベーションセンター　イヤーブック2025

伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック2025

Center for Innovation in Traditional Industries
Yearbook 2025

京都精華大学
Kyoto Seika University

伝統産業イノベーションセンターについて

未来の、手仕事のために

京都精華大学が4年制として開学した1979年、学生が伝統産業の工房に通い手仕事の技やその精神性を学ぶ〔学外実習（現：京都の伝統産業演習）〕が開講しました。以来、約40年間で累計4,000名近くの学生がこの演習に参加し、今では京都精華大学の名物科目のひとつとなっています。

身につけた伝統技術を自身の表現に取り入れる学生もいれば、日本文化への関心を深めて研究者や起業家を目指す学生もいました。また、実習をきっかけに職人としての道を歩み始める学生も少なくありません。実習期間はわずか2週間ですが、さながら弟子のように過ごす日々が学生たちに「伝統」と呼ばれるものの一端を伝えています。

実習を契機に、京都精華大学では多角的な視点で伝統産業界との協業が始まりました。製品開発やブランディング、技術記録・調査、職人文化研究など、京都精華大学が誇る5学部それぞれの専門性を活かした取り組みをおこなっています。

伝統産業イノベーションセンターは、これまで京都精華大学が培ってきた伝統産業の知見を集約し、より活発な教育・研究活動に還元するために2017年に設立しました。〔研究〕〔教育〕〔社会連携活動〕を大きな軸として、世界有数の工芸産地・京都を拠点にさまざまな国や地域の手仕事との連携を目指しています。

かつてない速度で暮らしのあり方が変化する時代にあって、1000年前の職人技に挑み続ける伝統産業界の知見は私たちに多くの気づきをもたらします。

技術の背景にある物語や、土地に暮らす人々の営み。
自然素材の厳しさ、身体を動かして汗を流すことの意味。

伝統産業が次代への継承に苦しむなか、大学が「伝統」に学ぶだけの時期は終えました。
先達への尊敬と深い理解をもとに、文化の本質が受け継がれた「未来」を描き続けることが、伝統の街で育った京都精華大学の使命だと考えます。

About the Center for Innovation in Traditional Industries

For the Future of Handcrafts

The Kyoto Traditional Crafts Internship began in 1979, the year Kyoto Seika University became a four-year institution. Since then, the program has continued to offer opportunities for students to learn techniques and philosophies of handcrafts at traditional workshops and studios. Over the course of 40 years, almost 4,000 students have participated in the program, and it has now become one of the most well-known courses in the university's curriculum.

Some students incorporate the newly-acquired traditional skills into their work, while others go on to become researchers and entrepreneurs with a deeper appreciation of Japanese culture. Inspired by their internship experience, there are also those who pursue careers in traditional crafts. The program is only two weeks, but the time spent as short-term apprentices offers students a glimpse into age-old traditions.

Through the internship program, Kyoto Seika University began collaborating with the local traditional craft industry. Drawing on the expertise of the five academic departments, the university has initiated product development and branding projects, as well as documentation of cultural knowledge and research into the everyday lives of artisans.

The Center for Innovation in Traditional Industries was established in 2017 to compile and utilize the academic resources on traditional industries cultivated by Kyoto Seika University. Located in one of the world's leading sites of craft production, the Kyoto-based center aims to build new partnerships in handcrafts across national and regional borders through research, education and public engagement.

At a time when our lifestyles change at an unprecedented speed, there is much to learn from craft professionals practicing artisanal skills from a thousand years ago.

There are stories, communities and real lives behind every technique.
There is meaning in the harshness of natural materials and in manual work.

We cannot simply learn from "tradition," while traditional industries struggle to pass down its wealth of knowledge to the next generation. As an institution that has grown in a city of traditions, we believe it is Kyoto Seika University's mission to envision a future that inherits the essence of our culture, with respect and understanding of our predecessors.

ごあいさつ Foreword

米原有二
京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター長

伝統産業イノベーションセンターは設立から8年目を迎えました。
2025年度は、これまで継続的に取り組んできた「八瀬陶窯」に関する調査研究プロジェクトの展覧会を開催することができました。このプロジェクトは、近代陶芸を代表する陶芸家、石黒宗麿が自宅兼工房「八瀬陶窯」に遺した陶片の整理から出発しています。芸術学部陶芸専攻の教員と学生たちによる、地道で、熱意ある取り組みがきっかけでした。以来、このプロジェクトはさまざまな立場の方々にご参加頂きながら、研究の視点を拡げてきました。多くの方々のお力添えなくしては実現できない展覧会でした。

今後の調査研究プロジェクトの芽を育てるべく、社会に開かれた研究会や勉強会の運営に力を注いだ年度でもありました。京都の若手職人団体の皆さんと開催する勉強会は2年目を迎え、職人さんと学生が伝統産業が直面する課題について語り合う風景もみるようになりました。

授業科目「京都の伝統産業実習」は開講から45年目の節目でした。夏の2週間、学生たちが職人さんの工房で過ごすこの実習は、手仕事の現場で技術と感性を学ぶ得難い機会となっています。

本学ならびに本センターが取り組む教育、研究活動は多くの学外の皆さまのお力添えで実現しています。これまでのご協力に心から感謝を申し上げます。

目次 Contents

02 伝統産業イノベーションセンターについて
About the Center for Innovation in Traditional Industries

04 ごあいさつ 米原有二
Foreword Yuji Yonehara

08 研究会 手仕事の学校

12 手仕事の学校 特別編1｜菓子器展

14 手仕事の学校 特別編2·3｜八瀬の民俗·民家·風景·路上観察
八瀬陶窯の庭·玩具のデザイン

20 特集= 展覧会「スケッチ―ズ｜八瀬の石黒さん家から見た世界」

26 陶芸チーム｜木村隆 田中大輝 中村裕太

28 玩具チーム｜尾崎織女 軸原ヨウスケ 長友真昭 山名伸生 米原有二

34 集古チーム｜菊地暁 松元悠 麥生田兵吾 フォック·チン

38 庭景チーム｜石川知海 山本麻紀子 小出麻代

40 建築チーム｜恵谷浩子 諏佐遙也 本橋仁 齋藤雅広

44 八瀬を歩く 散策としての「スケッチーズ」｜石原葉

40 社会連携 三宅工芸㈱との共同研究

42 社会連携 岩倉南小学校「工作部」

52 センターの活動

54 伝統産業イノベーションセンター 学内センター員·職員
Researchers and Staff Member

57 京都精華大学 協定校／機関
Kyoto Seika University International Partner Universities and Institutions

研究会

手仕事の学校

コーディネート―― 淡田明美［伝統産業イノベーションセンター］

研究会 手仕事の学校

1 京七宝 | 2025年5月30日〈金〉| 16:20―17:50 | 京都精華大学 明窓館3階 フリースペース
2 京指物・桐箱制作 | 2025年7月11日〈金〉| 16:20―17:50 | 京都精華大学 明窓館3階 フリースペース
3 京漆器 | 2025年7月18日〈金〉| 16:20―17:50 | 京都精華大学 明窓館1階 キャリアパーク
4 箔押し | 2025年11月21日〈金〉| 16:20―17:50 | 京都精華大学 明窓館1階 キャリアパーク
5 仏像彫刻 | 2026年1月16日〈金〉| 16:20―17:50 | 京都精華大学 明窓館1階 キャリアパーク

伝統産業に携わる多彩なゲストを招き、歴史や伝統、手仕事の文化について学ぶ研究会です。2025年度は、昨年に引き続き若手職人による「京の伝統産業わかば会」から5名のゲストに登壇して頂きました。京七宝、京指物・桐箱制作、京漆器、箔押し、仏像彫刻のゲストによるトークセッションを中心に、制作実演、作品紹介なども盛り込み開催しました。

日頃の手仕事の内容はもちろんのこと、ビジネスとしてどうあるべきか、減少（廃業）していく材料や道具の購入先の問題、後継者問題、問屋が機能していない、など現場で起きているリアルな問題についても語られました。また、これからの伝統産業の職人としてどう生きるべきか、社会に対してどう発信していくか、若手職人の苦悩と奮闘ぶりをお話しして頂きました。昨年度とは違ったリアルな現場を知ってもらい、考えるシリーズだったと思います。毎回10～20名の学生、教職員、一般の方々が参加され、熱心に質問やトークが行われて盛況な勉強会となりました。

2025年度 実施日程

第1回 | 5月30日[金] | 16:20—17:50 | 京都精華大学 明窓館3階フリースペース

【京七宝】京七宝の技法とデザイン（トークセッション・実演）

|ゲスト| 室井麻依子［京七宝 ヒロミ・アート］

第2回 | 7月11日[金] | 16:20—17:50 | 京都精華大学 明窓館3階フリースペース

【京指物・桐箱制作】桐にまつわる話と桐箱の制作工程（トークセッション・実演）

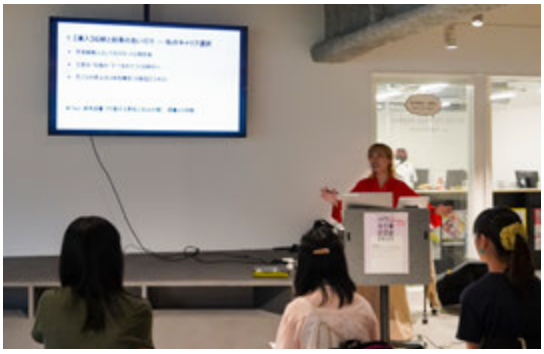
|ゲスト| 小島秀介［美術木箱小島］

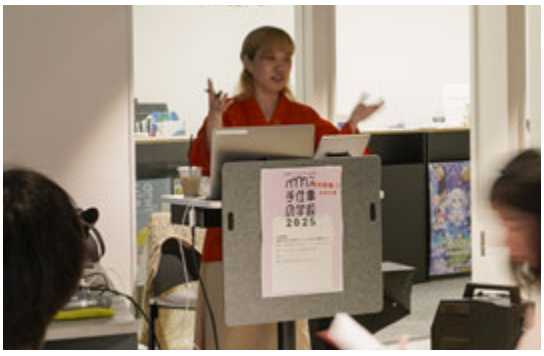
2025年度 実施日程

第3回｜7月18日［金］｜16:20―17:50｜京都精華大学 明窓館1階キャリアパーク

【京漆器】美術工芸で生活していくために必要なこと（トークセッション）

ゲスト　坂本智美［美術修復スタジオ 美彰院 -BISHOIN-］





第4回｜11月21日［金］｜16:20―17:50｜京都精華大学 明窓館1階キャリアパーク

【箔押し】11年間の修行を経て、私、独立しました（トークセッション）

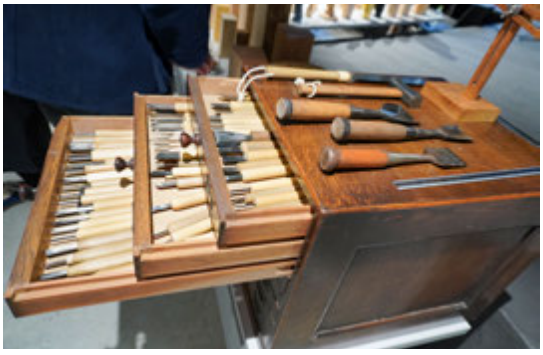
ゲスト　野口春海

2025年度 実施日程

第5回｜1月16日[金]｜16:20―17:50｜京都精華大学 明窓館1階キャリアパーク

【仏像彫刻】仏師の仕事、仏像のこと（講義・実演）

ゲスト 神園貴史



手仕事の学校 特別編——1

菓器展2025

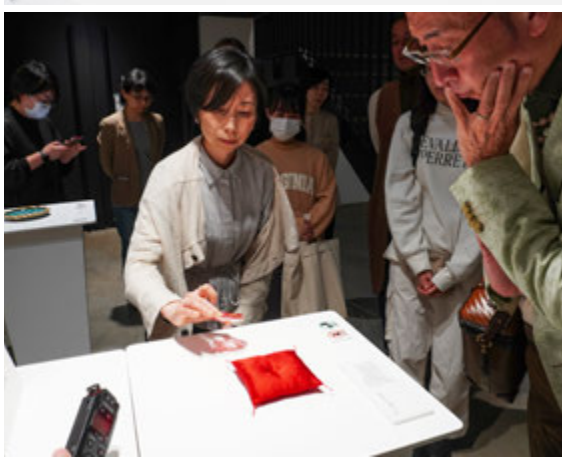
手仕事の学校 特別編——1 菓器展2025

日時＝2025年4月25日〈金〉10:00—19:00／4月26日〈土〉10:00—17:00
会場＝京都精華大学 明窓館 1F

参加作家——

岡山高大（陶芸）／甲斐可奈子（金属工芸）／加藤友理（漆芸）／川口真慈（木彫刻）／小泉亜子（漆芸）
水藤扶実（金属工芸）／廣戸一幸（彩色）／牧圭太朗（神具指物）／松山一成（浸染）／森紗恵子（爪掻綴織）
八木美詠子（陶芸）／山本果奈（染色）

京都の工芸職人12名による菓子の器をテーマにした作品展です。職人それぞれが日頃から愛してやまない菓子のために（非公式で）あつらえた器を展示しました。食の器として馴染み深い陶芸や漆芸のみならず、染色や木彫といった多彩な工芸分野からの出展が京都の手仕事の奥行きを知る機会となりました。会期中に開催した出展者による作品解説では本学のデザイン学部教員も交えて、器と手仕事のあり方を考える機会となりました。



手仕事の学校 特別編——2

八瀬の民俗·民家·風景·路上観察

手仕事の学校 特別編——3

八瀬陶窯の庭·玩具のデザイン

2018年度から調査研究を行ってきた「八瀬陶窯プロジェクト」。その集大成として今年度開催した「スケッチーズ｜八瀬の石黒さん家から見た世界」の関連イベントとして、手仕事の学校 特別編2「八瀬の民俗·民家·風景·路上観察」、特別編3「八瀬陶窯の庭·玩具のデザイン」を八瀬陶窯にて開催しました。
展覧会に関わったアーティストや研究者+ゲストによるトークとワークショップを行い、これまでの調査研究や制作の過程を参加者に追体験的に共有できる機会となることを目指しました。

手仕事の学校 特別編——2 八瀬の民俗·民家 風景·路上観察

日時＝2025年7月12日〈土〉13:00—17:00
会場＝八瀬陶窯

特別編——2

八瀬の民俗·民家·風景·路上観察

民家や風景、路上といった観点から八瀬地域を捉えるトークとワークショップを実施しました。
民家に見られる暮らしの習慣やものづくりの文化、また景観から読み取ることができる地域の風土について紹介し、参加者と共に理解を深めました。またワークショップでは、路上観察学会の林丈二氏をゲストにお迎えし、参加者と一緒に八瀬を歩き、路上に隠れたものの面白さについて探っていきました。

Talk 1

八瀬の民俗と民家
（今和次郎、西山夘三、路上観察、瀝青会）

登壇者
菊地暁（民俗学）

Talk 2

八瀬陶窯と八瀬の風景

登壇者
惠谷浩子（風景学）

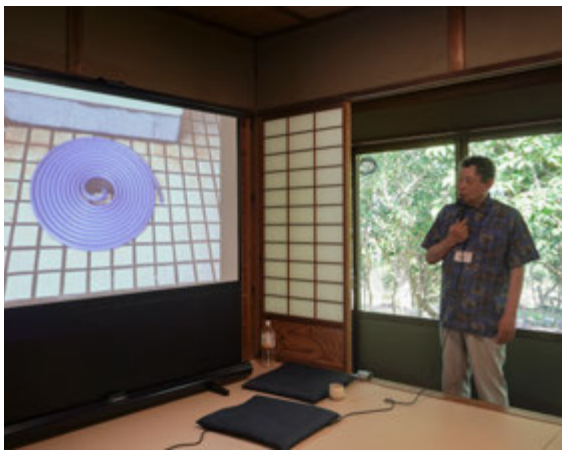
Workshop

八瀬の路上観察

ゲスト
林丈二（路上観察学会·イラストレーター·エッセイスト）

ファシリテーター
本橋仁（建築史家）

芸術新潮
4
楽しみ図会



通学路

手仕事の学校 特別編——3 八瀬陶窯の庭·玩具のデザイン

日時＝2025年7月13日〈日〉13:00—17:00
会場＝八瀬陶窯

特別編——3

八瀬陶窯の庭·玩具のデザイン

トーク1では、石黒宗麿が残したスケッチや石黒が暮らしていた頃に撮影された写真と比較しながら、現在の八瀬陶窯の植生を観察し、庭に向けられた石黒のまなざしを探りました。
トーク2では、かつて八瀬周辺で作られていた麦藁人形や、土人形の源流である伏見人形のデザインについてお話しました。ワークショップでは、麦藁と和紙を用いて八瀬の麦藁人形を制作しました。

Talk 1

石黒さんのスケッチと庭

|登壇者|
山本麻紀子（アーティスト）
石川知海（御庭植治）

Talk 2

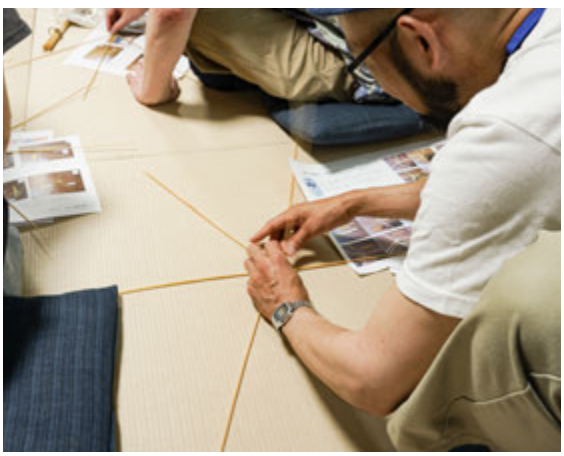
玩具工芸とデザイン

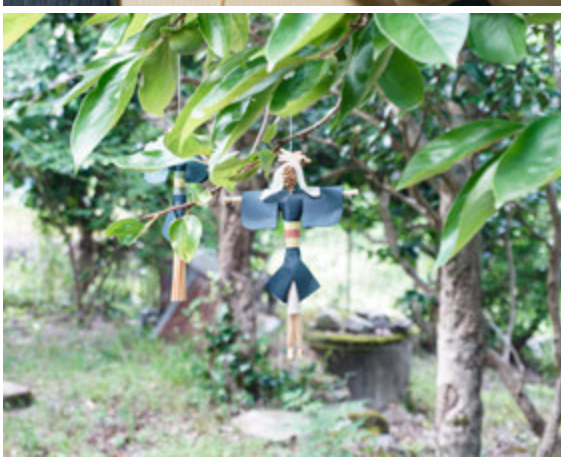
|登壇者|
軸原ヨウスケ（デザイナー·玩具工芸社）
長友真昭（玩具作家·玩具工芸社）

Workshop

八瀬の麦藁人形を作る

|講師|
尾崎織女（日本玩具博物館学芸員）
|ファシリテーター|
米原有二（伝統産業イノベーションセンター）





庭景
チーム

特集

展覧会

スケッチーズ｜八瀬の石黒さん家から見た世界

2018年から継続してきた「八瀬陶窯調査研究プロジェクト」では、「陶片群」「生活空間・工房」「人物像」の3分野から陶芸家:石黒宗麿についての調査・研究を行ってきました。

昨年度は、研究フィールドをさらに広げ、「八瀬」という地域が石黒宗麿の作陶や生活にどのような影響を与えたのかという観点から、「人間国宝 陶芸家:石黒宗麿」としてだけでなく、「八瀬地域に住む一生活者：石黒宗麿」に迫ることで、さらにその多様な作品群や人間像を紐解いていくことを目的とした調査を学外の研究者やアーティストと共に行いました。

2025年度は、展覧会「スケッチーズ｜八瀬の石黒さん家から見た世界」を開催し、これまでの研究・調査の集大成を発表しました。この特集では、展覧会で発表された作品や資料を紹介します。

「中村裕太『スケッチーズ｜八瀬の石黒さん家から見た世界』展を歩いて」よりテキスト一部転載

石黒宗麿と八瀬陶窯

石黒宗麿（1893-1968）は、1936年に京都洛北の八瀬で窯を築き、晩年までこの地を拠点に作陶を続けた。中国や朝鮮の古陶磁に肉迫しつつも、独自のエスプリを持った陶芸家として知られ、1955年に鉄釉陶器の技法による重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された。1956年には「財団法人八瀬陶窯」を設立し、後進の陶芸家の研究の場となることを望んだ。没後、関係者の管理を経て、2003年から京都精華大学が管理を行う。2018年に本学伝統産業イノベーションセンターにて「八瀬陶窯プロジェクト」を発足。2023年には工房のある家屋を修繕し、実地的な石黒宗麿の研究拠点として運用している。

石黒宗麿と八瀬陶窯（1956年頃、射水市新湊博物館提供）

＊石黒宗麿の漢詩《十年一日窯異趣》より

陶芸家 石黒宗麿の家は、八瀬の端っこにある。石黒さんは、よく縁側に腰を下ろし、庭を見ながら思索に耽っていたという。ここからどんな景色を見ていたのだろう。正面には比叡山の山並み、庭では妻のとうさんが菜園をし、犬たちが駆け回っている。季節ごとに梅や桜、柿、椿が色づき、鳥たちがさえずる。麓の街道に目を向けると、大八車を引く人々や柴を担いだ女性たちが行き交う。石黒さんのスケッチブックには、そんな八瀬の景色が何枚も描かれている。けれど、その膨大なスケッチを見ていると、八瀬という土地の風土や風習を描きながらも、ここではないどこかの景色を描いているように思えてくる。というのも、スケッチの多くは景色を写生したものではなく、皿や壺に合わせた図案へと展開されているからだ。

石黒さんは、山あいの八瀬での暮らしを描き留めることで、どこでもない世界を描き出そうとしたのかもしれない。とはいえ、残されたスケッチを眺めているだけでは、どうして石黒さんがそれらの景色を描いたのかが分からない。そこで、学内外の作家や研究者に声を掛け、石黒さんが暮らした「八瀬陶窯」でしばらく時間を過ごすことにした。家屋や庭の掃除をしたり、縁側に座って地元の方から話を聞いていると、ふいにそのスケッチが描かれた背景が見えてくる。そうやって石黒さんとの対話を重ねていると、いま、ここから見える世界を描いてみたくなってきた。本展では、石黒さんのスケッチをはじめ、陶芸・建築・庭景・集古・玩具という5つのチームが描き出したスケッチたちをお見せしていく。［中村裕太］

登り窯と漢詩のスケッチ
（1965-66年頃）
石黒さん家の庭は、ごろごろしている。石黒さんは家屋や登り窯を築く時、山から転がってきた石を積み上げて石垣を作ったという。集落を歩いていると、そうした古い石垣が見つかる。他方で、窯の近くからは石黒さんが割った陶器に混じって、石黒さんの手によらない普段使いの食器も見つかる。

集古
菊地暁（民俗学）
松元悠（版画家、美術家）
麥生田兵吾（写真家）

八瀬の民俗と観光

滋賀坂本の陶器

八瀬の陶器

八瀬陶窯周辺の石たち

坂道と垣根

路上観察学会《キリコ塀》
（1986）

西山夘三『住み方の記』
（1965）

瀝青会『今和次郎「日
（2012

民家のスケッチ
（1942年頃）
茅葺屋根のてっぺんから煙がモクモクと出ている。どうもこのスケッチは、実際の建物を見ながら描いたものではなさそうだ。石黒さんは、頭のなかにある理想の民家を描き出したのかもしれない。だから、墨書きされた建物のパースはどこかおかしく、ハリボテのようだ。

八瀬の石黒さん家から見た相関図

石黒さんのスケッチを手がかりとした5つのチームの制作や研究は、ゆるやかに影響し合いながらひとつの相関図を描き出した。
＊「石黒宗麿のスケッチブック（全て射水市新湊博物館蔵）」は、各チームの作品とともに展示されます。

柿の木のスケッチ
（1965年頃）
石黒さん家の縁側に腰を下ろすと、目の前に柿の木が見える。スケッチとは少し枝ぶりが違う。葉が落ちた晩秋の頃、石黒さんは丸い皿の図案に合わせて描いたのかもしれない。ここ数年は、柿がまだ青いうちに実が落ちたり、サルに喰われたりして、赤く実った柿を見たことがない。

枯木とカラスのスケッチ
（1965-66年頃）
枯れた木にカラスが留まっている。脇には「寒鴉枯木（かんあこぼく）」と漢詩の詩題が添えられている。「石黒さん家の庭で、枯れた木にカラスが留まっているのをみたことがある。けれど、このスケッチがこの庭を描いたものかわからない。今では見上げるほどの大木も、かつてはこれくらいの高さだったのかもしれない。

庭景

石川知海（御庭植治）
山本麻紀子（アーティスト）

わら縄
椿の木
石黒さん家の生活道具
庭木の剪定
比叡山
菜園と野草
八瀬陶窯の古写真
柿の木

陶芸

木村隆（釉薬研究）
田中大輝（陶芸家）
中村裕太（美術家）

野鳥
石黒宗麿の釉薬調合
石黒さん家の犬
石黒宗麿の陶片

庭木と落とし物
陶器の版画
スケッチタイル
八瀬の麦藁人形
饅頭喰い人形
八瀬陶窯の書割
石の写真

八瀬の石黒さん家

大原女人形
武井武雄『日本郷土玩具』（1934）
武井武雄《ムギワラザイク》（1928）
西澤笛畝『うなゐの友 八編』（1921）
有坂与太郎『伏見人形』（1929）
今和次郎『日本の民家』（1919）
伏見人形
茅葺屋根の民家
床の間
瀬陶窯の生活陶器
本の民家」再訪』

玩具

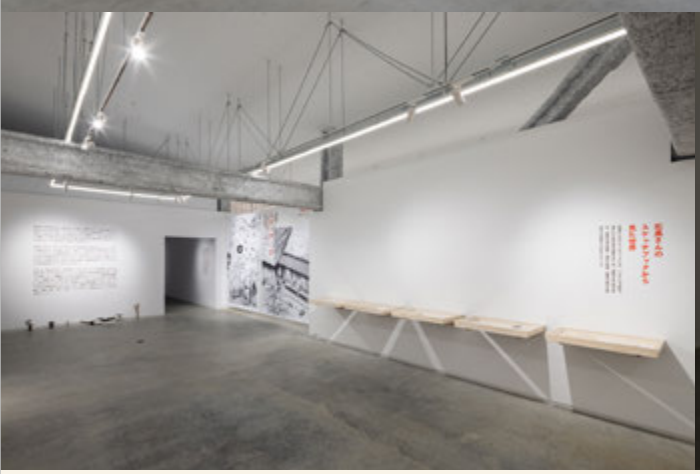
尾崎織女（日本玩具博物館学芸員）
軸原ヨウスケ（デザイナー・玩具工芸社）
長友真昭（玩具作家・玩具工芸社）
山名伸生（玩具蒐集家）

柴を担ぐ女性たちのスケッチ
（1961-62年頃）
石黒さん家の籬の街道には、柴を担いだ大原女や小原女（八瀬女）が行き交っていた。石黒さんはそうした女性たちのスケッチを何枚も描いている。けれど、あまりにもこの土地の風物であったためか、その題材を描いた陶器はまだ見つからない。

建築

恵谷浩子（風景学）
諏佐遙也（模型製作）
本橋仁（建築史家）

スケッチーズ
八瀬の石黒さん家から
見た世界
Sketches



展覧会「スケッチーズ｜八瀬の石黒さん家から見た世界」

会期 ‖ 2025年6月27日〈金〉—8月3日〈日〉
会場 ‖ 京都精華大学ギャラリーTerra-S
主催 ‖ 京都精華大学
企画 ‖ 京都精華大学伝統産業イノベーションセンター、京都精華大学ギャラリーTerra-S
助成 ‖ 公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団
協力 ‖ 射水市新湊博物館、京都市左京区役所八瀬出張所、日本玩具博物館、路上観察学会40周年記念事業「路上観察よ いつまでも」
企画担当 ‖ 伝統産業イノベーションセンター（中村裕太、小出麻代）、ギャラリーTerra-S（齋藤雅宏）
運営担当 ‖ 伝統産業イノベーションセンター（米原有二、フォック・チン）、ギャラリーTerra-S（伊藤まゆみ）
マンガ ‖ 谷本研　**テキスト** ‖ 中村裕太　**翻訳** ‖ レベッカ・ジェニスン
デザイン ‖ 仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura）
会場設営 ‖ タケダ工作所　**会場撮影** ‖ 麥生田兵吾

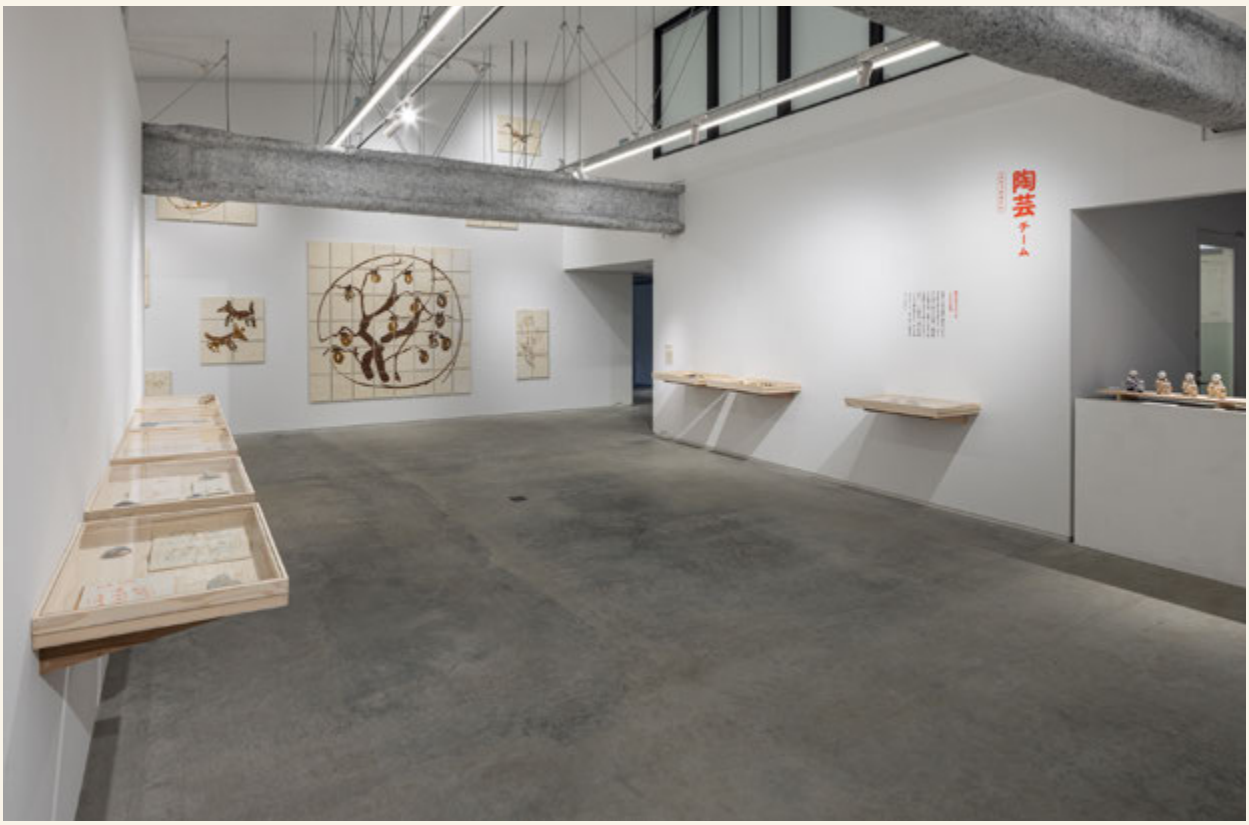
陶芸 チーム

木村隆［釉薬研究］／**田中大輝**［陶芸家］／**中村裕太**［美術家、伝統産業イノベーションセンター］
コーディネート── **中村裕太**

陶芸チームは、石黒さんのスケッチブックに記された釉薬の調合表に目を向けた。会場の壁面には、石黒さんのスケッチの中から庭の柿の木や柴を担いだ女性たちなどを抽出し、再現した釉薬を用いてタイルにその図案を焼き付けた。

木村隆、田中大輝、中村裕太
《石黒さん家から見た世界》
陶
2025

陶芸チームの一番の関心事は、石黒さんが書き留めた釉薬の調合表だった。実験を繰り返すなかで付け加えられた判読できない文字や数字、今は手に入らない原料をみては、3人で想像力を働かせた。そうして焼き上げたテストピースと八瀬陶窯から掘り起こされた陶片を並べて話し合う時間を重ねてきた。ところが、ある日お弟子さんから、晩年の石黒さんはバケツに入った釉薬が減ってくると、ざっくりと柄杓で原料を掬って混ぜ合わせていたと聞き、拍子抜けした。こうしたラフさは、石黒さんのスケッチにも感じる。八瀬の風景をコンテで走り書きしているように見えて、その線を拡大してタイルに描いてみても粗が見えてこない。そんなところに石黒さんの仕事の確かさがあるんだと思う。［中村裕太］


陶芸
チーム

玩具 チーム

尾崎織女［日本玩具博物館］／軸原ヨウスケ［デザイナー／玩具工芸社］／長友真昭［玩具作家／玩具工芸社］／
山名伸生［玩具蒐集家］／コーディネート── 米原有二［伝統産業イノベーションセンター］

玩具チームは、石黒さんが柴を担ぐ女性たちをスケッチしたことに目を向けた。そして、かつて八瀬地域周辺で作られていた「八瀬の麦藁人形」という郷土玩具に着目し、その制作方法の分析と復元を行った。
また、日本の土人形の源流とされる伏見人形にも目を向けた。江戸期の農書『広益国産考』が農閑期の副業として郷土の土人形の生産を促したことに触れ、伏見人形が日本各地に派生していった軌跡を描き出した。さらに、石黒さんがかつて饅頭を売って生計を立てていたという逸話をもとに、「饅頭喰い人形」をリメイクした「饅頭売り人形（石黒宗麿人形）」の製作も行った。

左：尾崎織女、軸原ヨウスケ、長友真昭、山名伸生
《八瀬の麦藁人形》
麦藁人形、麦藁、和紙、書籍
2025

石黒さんは晩年までの35年間を八瀬で過ごしたが、その暮らしぶりや作陶における地域性はほとんど確認できていない。書画も含めた一部の作品に洛北の情景を題材にしたものがある程度だ。これまでの調査でも、往時を知る近隣の方々の記憶に残るのは妻・とうさんの朗らかさばかりで、石黒さんの人柄や言動を覚えている方にはまだ出会えていない。それだけに街道を行く大原女や小原女（八瀬女）を描いたスケッチは石黒さんと八瀬を繋ぐ貴重な資料となる。八瀬の日常だったこの風景を石黒さんが眺めていた、という小さな事実が、生活者としての石黒さんの輪郭になっていく。途絶して久しい麦藁細工の再現は玩具チームの探究心と偏愛によって実現した。そして、その過程は石黒さんの視点について考える時間でもあった。［米原有二］

右：尾崎織女、軸原ヨウスケ、長友真昭、山名伸生
《『広益国産考』から考える伏見人形の転用と影響》
伏見人形、木材、書籍
2025

もともと別の活動だった伏見人形研究会と八瀬陶窯に関するプロジェクトは緩やかに合流した。両者を結びつけたのは地域と個人がもつ物語性への関心だった。伏見人形を源流とする各地の土人形はかつての地域経済や習俗を伝えるメディアだ。同じ題材であっても地域の事情を反映した個性が育まれてきた。八瀬陶窯で伏見人形について語りあうなかで、土人形の伝播と地域性をモデルとした、石黒さん個人の生活風景を題材にした人形制作の着想にいたった。石黒さんの来歴については記録が乏しく、玩具チームは題材の検討段階から議論と試作を重ねていく。その試行錯誤は郷土玩具作家、長友真昭の手による「饅頭売り人形」として結実した。［米原有二］

玩具チーム

伏見

富山
金沢

制作ノート

『広益国産考』から考える伏見人形の転用と影響

軸原ヨウスケ［デザイナー／玩具工芸社］

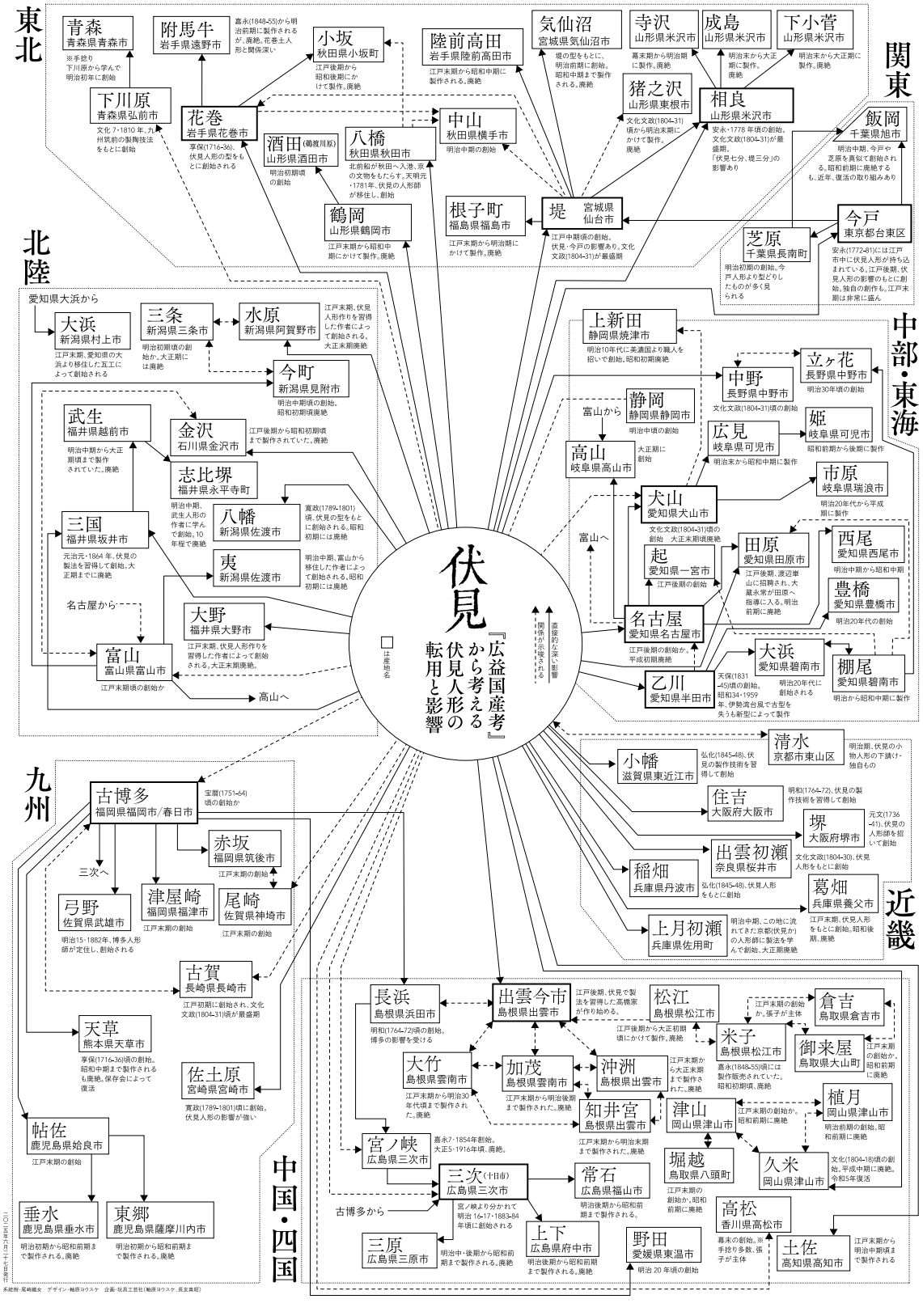
伏見人形は全ての郷土玩具のお手本とも言われており、「土人形（郷土玩具）のルーツは伏見人形」という話は玩具愛好家の間ではよく知られている。

江戸時代後期、伏見稲荷大社の参拝者は増加を続け、その街道土産として伏見人形は隆盛を極めていた。御所人形に比べると、伏見人形は庶民的な存在で比較的安価に買うことができたこともあり、当時、伏見人形の窯元は60軒近くもあったそうだ。

京都でおみやげとして買われた伏見人形は全国各地に持ち帰られるが、そこからの一部の民衆の知恵が働く。伏見人形を勝手に型取りして、似た人形を作り始めたら、自分たちの地域でも売れるに違いない、と。持ち帰った伏見人形を粘土で型取りし、焼き固める。その型の中に土を詰め、つなぎ合わせ、窯で焼く。最後に胡粉を塗り、伏見人形をお手本に絵を描く。こうした人形を農閑期などに作り、誰に許可をとるわけでもなく売り始めたのだ。それこそが今も日本中に残る郷土玩具（土人形）の始まりとされている。江戸末期に出版された農書『広益国産考』（大蔵永常著、1859年に全8巻発行）では農業の副業として、伏見人形の勝手な複製を推奨している。こういった勝手な複製は『広益国産考』の出版のずいぶん前かから、全国に見られたと考えられている。複製されてできた人形を、また別の地域で型取りし複製、その人形をまた別の地域で型取り…を繰り返し、さながら伝言ゲームのような玩具の複々製活動がアメーバのように全国に広がっていった。なので、京都から離れるほど花などの柄はぼやけて抽象的になり、型も鋭利な輪郭線を失っていく、という非常に面白い現象が起きていた。

ここでは石黒さんが饅頭を売っていたというエピソードに着想を得て、伏見人形の代表的なモチーフである「饅頭喰い人形」「童子」を中心に、その転用と影響の広がりを実際の郷土玩具を用いて地域ごとにまとめてみた。

大蔵永常『広益国産考』1859年



系統樹:尾崎織女　デザイン:軸原ヨウスケ　企画:玩具工芸社(軸原ヨウスケ、長友真昭)

制作ノート

饅頭売り人形（石黒宗麿人形）

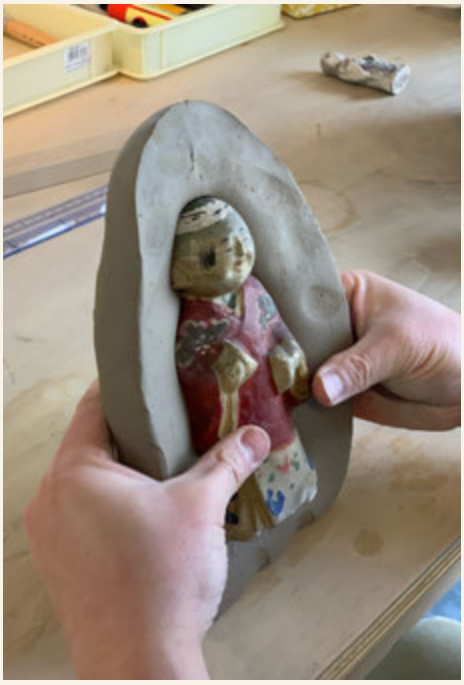
長友真昭［玩具作家／玩具工芸社］

石黒さんは作品が売れるようになる前は饅頭を売って生計を立てていたらしい。そんな若き日の姿を、大蔵永常の『広益国産考』を参考に、伏見人形の「饅頭食い人形」を型取り、「饅頭売り人形 石黒宗麿」として製作した。「饅頭食い」という人形は、「お父さんとお母さんどちらが好き？」という質問に対して、童子が手に持っている饅頭を二つに割り「どちらが美味しい？」と問い返した、という教訓話に基づいて作られた伏見人形の代表的な人形である。

まずは戦前期に作られた饅頭食い人形を購入し、それに土を貼り付ける。型取りしたものを焼成し雌型を製作。その型に薄く伸ばした土を押し付け、乾燥したら取り出し、前後を合わせる。乾燥させた後、素焼きし、胡粉を何度か塗り重ねる。泥絵の具で着色をして完成。

着物の模様は石黒さんの庭から掘り出された陶片から3種と代表的な柿の木の模様を拾い上げて4種類製作した。

素焼きした饅頭喰い人形に、胡粉を何度か塗る



購入した饅頭喰い人形を粘土で型取りする

胡粉の上に、泥絵の具で着色する

完成した人形

制作ノート

八瀬の麦藁人形

尾崎織女［日本玩具博物館学芸員］

石黒さんが八瀬の里に築窯した昭和のはじめ、「八瀬の麦藁細工」の名で親しまれる洛北の郷土玩具があった。それは、大原の里から八瀬、さらに三宅八幡宮のある高野の里を通って柴や薪を洛中へと行商した“大原女や小原女（八瀬女）”の姿をうつしたもので、麦藁を編んだ頭には白い和紙の手拭いを、胴には紺和紙の衣を着せ、頭上に結び付けた麦藁束を柴に見立てた風雅な人形である。童画家・武井武雄は、自著『日本郷土玩具 西の部』（昭和5年）のなかで、八瀬の大原女には品位があり、「京都名玩中の一としてまづ挙ぐべきもの」と絶賛している。

八瀬の麦藁細工には、大原女のほかに灯籠や山籠があり、それとよく似たものが三宅八幡宮参道の茶店でも笹につるして売られていた。「三宅八幡の麦藁細工」は、糸で結んだ麦藁束につやのある西洋紙を着せた簡素なつくりで、大原女、灯籠、馬乗り武者、船乗り、自転車乗りなどの種類があった。

戦前の大原女の作者としては、山端に住む森田タキの名が知られる。ただ、彼女の作った大原女が八瀬の里で売られたものか、三宅八幡宮の参詣土産であったかは判然としない。戦後は麦作の退潮もあってか、製作が途絶え、昭和の終わりに川久保フミが三宅八幡の麦藁細工を復活させたが、それもまもなく姿を消してしまった。

玩具チームでは、石黒さんが暮らした洛北の名玩に光を当てようと、早春の八瀬陶窯に集い、戦前の文献や実物を広げて八瀬の麦藁人形の再現を試みた。このコーナーでは、八瀬の大原女とその資料、三宅八幡の麦藁細工、我々が再現した品々とその過程を紹介したい。

絵葉書「八瀬風俗 小原女」

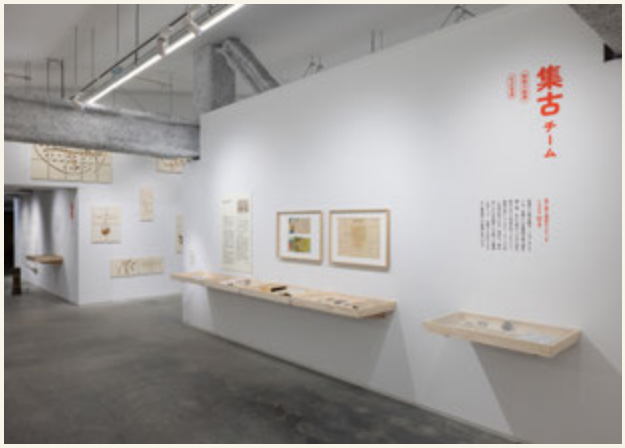
集古 チーム

菊地暁［民俗学］／**松元悠**［版画家／美術家］／**麥生田兵吾**［写真家］／
コーディネート── **フォック・チン**［京都精華大学芸術研究科］

集古チームは、八瀬にまつわる書物、陶片、石などの古物に目を向けた。菊地暁は、小原女（八瀬女）が描かれたマッチラベルやスタンプのスクラップ帖などの文献資料を収集することで、八瀬における伝統的な民俗文化と近代的な観光文化という歴史が織りなしてきた地域の魅力を指摘している。松元悠は、八瀬陶窯から掘り起こされた陶片のなかから、石黒さん家で使われていたであろう生活陶器に目を向けた。たとえば、森永牛乳の景品のマグカップは、生活者としての石黒さんの暮らしぶりが想像できて面白い。さらに、八瀬や坂本で暮らす人々の生活の器も収集し、石版画の連作を仕立てた。麥生田兵吾は、八瀬陶窯周辺の石に目を向けた。八瀬集落は比叡山と瓢箪崩山との間にあり、石黒さん家の裏山にあたる瓢箪崩山には、信仰の対象とされてきた巨石や石仏、墓石などが点在している。また八瀬の集落には、そうした石を用いた古い石垣も多く残されている。そうした有象無象な石たちを分け隔てなく壁面に構成している。

菊地暁
《伝統と近代のはざま》
書籍、絵葉書、他
2025

八瀬の村人は、八瀬童子として天皇の駕輿丁を務めた由縁から、京都市登録無形民俗文化財「八瀬赦免地踊り」の伝統を受け継いでいる。また、八瀬地域は避暑地としても観光が盛んだった。ここを訪れた人々は、遊園地を楽しむ一方で、今和次郎が調査した民家や、薪を売り歩く小原女（八瀬女とも呼ばれる）も目にしたことだろう。
観光客の興味も、研究者の関心も惹きつけてきたこの土地は、今もなお、さまざまな側面を見せてくれている。民俗学者・菊地暁は、民家研究をはじめとする調査のために八瀬に通い続けており、本展では八瀬周辺にまつわる資料を選び抜いて紹介している。［フォック・チン］



松元悠
《「あっちとこっちの器」石版印刷による図説》
多色石版画、ウォーターフォード紙
2025

陶芸家の食卓には、いったいどのような器が並ぶのだろうか。弟子の方から伺った話によると、石黒宗麿は日頃から市販のお茶碗でご飯を食べ、普段使いの食器を持っていたという。
版画家・松元悠は、明治期から日本で作られてきた石版画（リトグラフとも呼ばれる）を制作している。今回は、日々比叡山の両側を往来する自身の生活体験を背景に、八瀬周辺の生活食器を石版画で記録した。石黒家に埋まっていた器の破片も、山を越えて滋賀県坂本にお住まいの方々の所有物も、図鑑のような石版画に収められている。［フォック・チン］

麥生田兵吾
《磊磊》
インクジェットプリント
2025

八瀬陶窯の周辺を散策していると、時の積み重ねを感じさせる石の群れによく出会う。この地域は、多彩な祭りや行事が根付いた、霊性豊かな里でもある。そのためか、石垣や墓石だけでなく、灯籠やお地蔵さま、石仏も珍しくない。同じ「石」といっても、その姿かたちは実に多様で繊細であり、集落の雰囲気を感じ取る手がかりとなるかもしれない。
写真家・麥生田兵吾は、冬から春にかけて季節を越えながら山を登り、道中で気になった石たちを写真に収めていった。八瀬陶窯という原点から出発し、石を通して、あの場所に暮らす人々の痕跡を追いかけていた。
［フォック・チン］

制作ノート

伝統と近代のはざま

菊地暁［民俗学］

石黒宗麿が居を定めた八瀬は、千年の都を支える近郊農村の一つだった。鴨川の支流・高野川が貫く谷間の村である八瀬は、田畑は少ないが森林に恵まれ、八瀬女と呼ばれる女性たちが頭上運搬した薪炭は、都人の大切なエネルギー源となった。八瀬は天皇家との深い繋がりでも知られている。比叡山に逃げる後醍醐天皇の御輿を村人が担いだことから、褒美として八瀬村は赦免地（免税地）特権を獲得した。このため、代々の天皇から与えられた綸旨という文書が村に残されている（2010年、国重要文化財に指定）。この特権は江戸幕府にも追認され、これにあずかった老中・秋元様に感謝する「赦免地踊り」は、村の氏神・八瀬天満宮の秋祭りで今も奉納されている。

赦免地踊りをはじめとした八瀬天満宮の行事は、村に代々続く家々によって構成される八瀬童子会により担われている。古記録により平安末期にはその存在が確認され、文献上は日本最古の宮座である。「神殿」と呼ばれる神主が村人から選ばれ、一年間、潔斎して神役を務めていることは、二十一世紀の日本にあって驚くべきことかもしれない。

とはいえ、古風を残す八瀬にも近代は訪れる。1925（大正14）年には、八瀬駅開業、ケーブルカー開業、八瀬遊園開園と、モダンな施設が急速に整備される。展示されているパンフレットもそうした流れで作成されたもので、朱印帖は、鉄道やケーブルカーを使ってこの地を訪れたモダン・ツーリストの遺品であろう。

同時に、近代的な学問やジャーナリズムの視線もこの地に注がれる。八瀬の民家も収めた『日本民家史』（刀江書院1927）は、第三高等学校（現京都大学総合人間学部）教授であった地理学者・藤田元春の著書。『日本民家譜』（便利堂1931）は、毎日新聞社京都支局長を務める傍ら、京都帝国大学の学者たちとも親しく交流し、学問にも熱心だった岩井武俊の著書。

豊かな伝統を抱く八瀬は、近代を生きる村でもある。その歴史が織りなす魅力は、古都・京都にあってなお、独自の存在感を放っている。

秋里籬島・著 竹原信繁・画「八瀬」『都名所図会６巻［3］』1786年

庭景 チーム

石川知海［御庭植治］／山本麻紀子［アーティスト］
コーディネート── 小出麻代［伝統産業イノベーションセンター コーディネーター］

庭景チームは、八瀬陶窯の庭に目を向けた。石黒さんが八瀬に越してきてから90年の間、その植生も変化してきた。古写真に映り込んだ背の低い柿の木は、今では見上げるほど大きく育っている。庭の木を剪定して切り揃えた柴を縄で括り、かつての八瀬陶窯の庭木の配置に倣い、会場に置いていく。さらに、土の中から掘り起こした生活用品を組み合わせたオブジェが合わさって愛らしい。

山本麻紀子
《石黒夫妻が過ごした庭の景色》
八瀬陶窯の庭の木から切り出した枝、
八瀬陶窯の庭から掘り出したものたち、
子供たちに集めてもらった枝・実など、稲藁
2025

山本麻紀子
《石黒夫妻へのお手紙》
和紙、水彩絵具
2025

山本麻紀子は、八瀬陶窯の庭で多くの時間を過ごしてきた。庭師の石川知海や協力者との剪定作業、古写真と現在との植生の比較などを通して庭を見つめ続けた。山本が捉えようとしているものは、今見える庭の景色だけではないのだろう。
八瀬陶窯の庭から掘り起こされた多数の生活道具を、山本は「おとしもの」と呼ぶ。石黒夫妻の暮らしや時間を想起させうる「おとしもの」は、庭の剪定時に出た枝や、子どもたちによって集められた枝などと合わさり、山本や協力者の手を通し、庭を模した展示室に構成される。
かつて夫妻が母屋から眺めたであろう庭の木々の配置や風景の重なり、またその夫妻の生活を見守ってきた人々や様々な「いきもの」たちの気配。この「庭」では、複数の眼差しが混ざり合っている。
石黒夫妻はこの「庭」をどのように眺めているだろうか。［小出麻代］

庭景
チーム

建築チーム

惠谷浩子［風景学］／**諏佐遙也**［模型製作］／**本橋仁**［建築史家］／
コーディネート── **齋藤雅宏**［ギャラリー Terra-S］

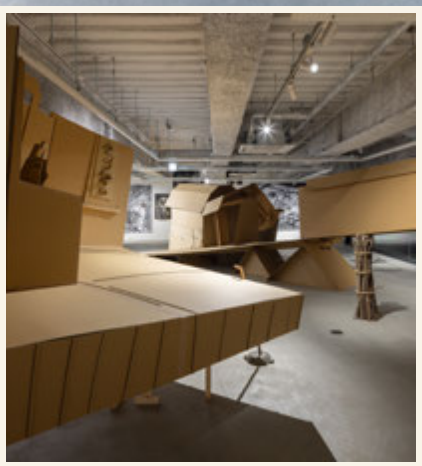
建築チームは、石黒さんが描いた民家のスケッチに目を向けた。おそらく八瀬に引っ越してきた頃に描かれた坂道から自邸へのアプローチ、民家の外観、床の間などのスケッチは、どれも建物のパースが狂っている。彼らは、そのヘタさにこそ魅力を見出し「ヘタパース」と名付けた。そして、ダンボールを組み上げていくことで、会場に立体的に描き出した。

諏佐遙也、本橋仁
《ヘタパース フィギュア ピシッとした床の間》
原案：石黒宗麿
翻案：諏佐遙也
ダンボール、ガムテープ、ステッキ、陶片、書籍
2025

諏佐遙也、本橋仁
《ヘタパース フィギュア 方形屋根からケムリモクモク》
原案：石黒宗麿
翻案：中島幹太
ダンボール、ガムテープ、木、陶片、書籍
2025

諏佐遙也、本橋仁
《ヘタパース フィギュア 坂を登ればお家ついた》
原案：石黒宗麿
翻案：惠谷浩子
ダンボール、ガムテープ、一輪車、陶片、書籍
2025

石黒が残した八瀬陶窯のスケッチは、かつてそこに存在した空間を知る貴重な資料である。特に茶室は現存しておらず、スケッチと写真からその姿を想像するしかない。しかし、石黒の緩やかな線は正確なパースを描くものではなく、描かれた空間は歪んで見える。
チームは八瀬陶窯の門、居室、家屋外観のスケッチを参考に、ダンボールで模型を作成。それを3Dスキャンで拡大することで、石黒の線が生み出す独特な空間をギャラリー空間に再現した。この試みは、石黒のスケッチが持つ広がりを考察するものである。［齋藤雅広］



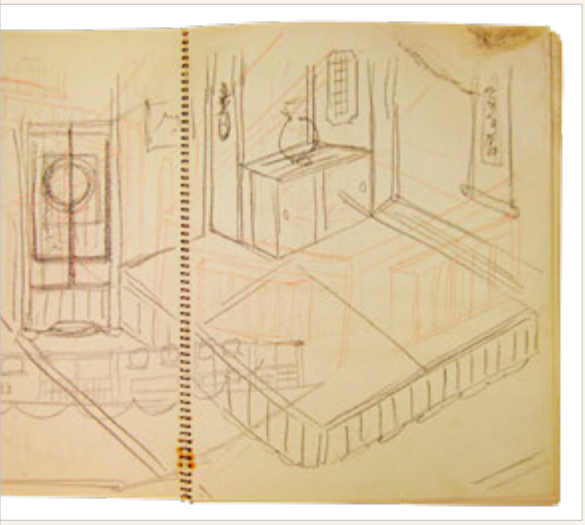
制作ノート

石黒さんの建築スケッチーズ

本橋仁［建築史家］

普請道楽という言葉がある。建物を建てることを普請と呼ぶが、それを趣味として楽しむ人のことだ。もちろん建築をつくることのハードルが金銭的にも技術的にも高いことは、昔も今もそう変わらない。それでもかつては、家を建てたり修繕したりすることを、今よりも自分ごととして捉え、それを自らの手で考える喜びを感じたりもする。石黒さんのスケッチからは、そんな自分で家を考える感覚が伝わってくる。

彼は建築にまつわるスケッチをたくさん残した。それが実在の建築なのか、建ててみたい空想の建築なのか、資料からは判然としない。だが手から生み出される線から、なにを生み出したいのかが、たしかに伝わってくる。パースペクティブが丁寧に描かれているかは問題ではない。でも、そのパースの下手さ（人間国宝に失礼!）のなかに、建築の楽しさや切実さが滲み出ているようにも見える。



石黒宗麿《床の間のスケッチ》1941-43年頃

建築を学ぶと、どうしても図面やパースのお作法に囚われがちだが。でも、石黒さんのスケッチは、そうした作法の外側にある。

手癖と衝動で描かれたその線から、空間を無理やり立ち上げてみよう——そんな発想から生まれたのが、ダンボール建築。ダンボールは、ザクザクとノコギリで切れるし、ちぎることもできる。多少歪んでいても、ガムテープでいくらでもつなげられる。手を使って粘土をこねるように、ダンボールで空間にスケッチを描くことができるのだ。 石黒さんの少し不器用なスケッチを手がかりに、私たちはもう一度、手で考える建築、身体で組み立てる空間に向き合ってみたいと思った。

ヘタバース

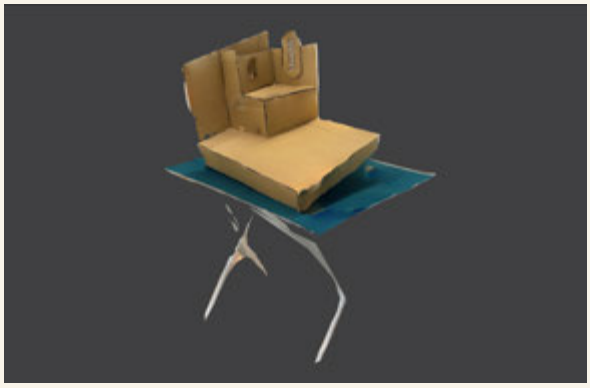
本橋仁［建築史家］

一枚の紙の上に、サイコロを描いた図をイメージしてみて欲しい。二次元平面上に描かれた、擬似的な立体（三次元）の図は、パースペクティブ（通称：パース）と呼ばれる。そもそも三次元の建築を、平面図／断面図／立面図として描き分ける視点こそ、人間では持ち得ない神様さながらの視点であって、より直感的に把握できるのは、むしろパースのもつ擬似的な三次元表現である。

石黒さんは、八瀬陶窯のスケッチをたくさん残した。それは建築家が描くようなピシッとした線よりも、ラフでどこか歪んでいる。しかしそのスケッチがどこか八瀬陶窯という場所を生々しく感じさせるのは、それがきわめて主観的なものだからかもしれない。現象学的には、場所の認知は自己の主観と、他者の主観とが結びつくことによって生まれる相互主観性をもつとされる（アルフレッド・シュッツ）。わたしたちは、石黒さんの歪んだパースから感じる空間

の拡がりを「ヘタバース（Hetaverse）」と名付け、

その石黒さんの主観性と、また現代にまでにこの場所を訪れ、記録された八瀬を巡る「目」とを対峙させ、主観と主観の交差によって、「八瀬」という場所が立ち上がる可能性を探ろうとしている。



諏佐遙也《ヘタバース マケット ピシッとした床の間》2025年

窯とヴォイドに向ける目

本橋仁［建築史家］

八瀬のかまぶろを覗けば、日本におけるヴォイド（空虚）が立ち現れる。八瀬という場所の特異性は、京都の郊外でありながら、禁中と深く結びついた中心性をも併せ持ち、それが歴史軸のなかで重層的に共存している点にある。

こうした特殊な場所に惹かれ、多くの「目」が八瀬を巡ってきた。大正期には、考現学を提唱した今和次郎が訪れ、その観察の成果を『日本の民家』（1919年）に記録した。戦中には建築家・西山夘三が疎開でこの地に暮らし、『住み方の記』（1965年）に残した。1986年に発足間もない路上観察学会が八瀬を再訪し「キリコ塀」と名付けた名品を発見。名を与えることでモノに語らせ、新たな物語が自律的に立ち上がる。記録ではなく観察を超える瞬間がそこにある。2000年代には、建築史家の中谷礼仁を中心に結成された瀝青会が今和次郎の足跡を追って再び八瀬を歩いた。左京区役所八瀬出張所に残されたファイルには、やはり「目」が集積される。

それぞれ異なる時代を歩いた者たちだが、その「見るという行為」のあり方は大きく異なっていた。歪んだヘタバースの空間とそこに宿る主観。そしてまた、別の主観が歪みの合間に見える。こうして、主観と主観とが交差し、相互に響き合うことで、八瀬という場は新たなかたちで立ち上がっていく。

秋里籬島・著 竹原信繁・画「八瀬竈風呂」『都名所図会6巻［3］』1786年

展覧会レビュー

八瀬を歩く 散策としての「スケッチーズ」

石原葉［伝統産業イノベーションセンター］

2025年6月27日〈金〉―8月3日〈日〉京都精華大学Terra-Sにて「スケッチーズ｜八瀬の石黒さん家からみた世界」が開催された。
「スケッチ」とは「アイデアや構想を素早く表現した絵や図、対象の概念や特徴を捉えるための修行手段」のことを指し、八瀬陶窯に残された石黒宗麿（以下親しみを込めて石黒さんと呼ぶ）にまつわる資料や地域へのリサーチをもとに『陶芸』『玩具』『集古』『庭景』『建築』の5つのアプローチから石黒さんが見つめた世界を捉えようとしたものである。

まず会場に入って眼に飛び込んでくるのが谷本研によるマンガだ。石黒さんと妻のとうさん、まだ大原女が行き交う姿が当たり前だった八瀬の風景が一目でわかる。どこか懐かしいような日本の風景。隣室では、現在の八瀬陶窯の姿とそこで見つかった大量の陶片やろくろなどが中村裕太のナレーションと共に映し出され、そこに訪れた本展のアーティストや研究者が想像を膨らませたように、鑑賞者もまた断片への興味を抱き、石黒さんの世界へ散策をし始めることになる。

『陶芸チーム』は石黒さんが残したスケッチや破棄した陶片（石黒さんは大量の作品を窯入れしたとしても納得できる数点以外は窯のそばに割り捨ててしまっていたらしい）をもとに大きく引き伸ばし陶板作品を作成した。その際、石黒さんが調合した釉薬を再現しようと研究を重ねたという。温かみがあるのに、どこか凛とした釉薬の美しさもそうだが、なによりスケッチの線が心地よい。ハガキ大より少し大きいくらいの写生帳は常に持ち歩いていたものだろうか。迷いなく描かれた線は大きく拡大されてもなおバランスが良く、日々スケッチを習慣としていた石黒さんの力量が窺える。

農作業や薪を頭に乗せ運ぶ人々を描いた陶板を眺めながら歩くと『庭景チーム』の山本麻紀子による《石黒夫妻が過ごした庭の景色》が現れる。庭の木々から切り出された枝や近所の子どもたちに拾ってもらった枝や実、山本が「おとしもの」と呼ぶ庭に残された生活の欠片によって組まれた切株は、じっと眺めていると錆びた金属や枝が昆虫や植物に見え、小さい頃庭で遊んだ時の記憶を思い起こさせる。

壁面に並ぶのは『集古チーム』の菊地暁の集めた八瀬の資料と松元悠の《あっちとこっちの器》だ。八瀬にある八瀬天満宮は、古くは平安末期の記録に存在が確認されているという。八瀬の伝統を示す資料の傍ら、ケーブルカーなど近代の風を感じるパンフレットが並ぶのが面白い。一方、松元が集め石版画で記録したのは八瀬周辺の生活食器である。陶芸家であった石黒さんが意外にも普段日常使いをしていたのは市販のお茶碗だったそうだ。松元は日々、比叡山の両側を往復することから八瀬周辺で集めた生活食器に加え、滋賀県坂本にお住まいの方々の生活食器も合わせて収集した。生活食器はなんでこんなにも想像心をくすぐるのだろうか。キャラクターのついたコップや名前が刻まれたマッチ入れを見ていると一家団欒の日常が思い浮かぶ。

小部屋へと進むと大量の人形に目をみはる。ここでは『玩具チーム』による伏見人形のアーカイブと、石黒さんを題材とした「饅頭売り人形」の開発について説明されている。石黒さんは陶芸が軌道にのる前は饅頭を売って生計を立てていたらしい。その姿を伏見人形の「饅頭割り人形」に重ねて、着物柄に陶片の図案を拾い上げて作られたのが、この人形である。半分に割った饅頭を差し出す姿は愛らしい。この饅頭売り（石黒宗麿）人形が生み出されたのも、単純な思いつきではないようだ。元々伏見稲荷神社の参道で土産物として作られた伏見人形は江戸時代後期から旅人によって全国へと運ばれていく。その際に人気にあやかろうと無許可

「石黒宗麿スケッチ帳と陶片」
スケッチ帳（射水市新湊博物館蔵）
撮影：麥生田兵吾

「石黒宗麿饅頭売り人形」
制作：長友真昭
撮影：麥生田兵吾

の模倣品が各地で作られ派生していった。本展でも伏見人形が全国各地で緩やかに変容しながら愛されていたことが、実物を見ていると伝わってくる。九州や四国の人形に鯛をモチーフにしたものが多いのは漁業が盛んだからかしら……指を差し想像するのも楽しい。ちなみにこの「饅頭売り人形」も抽選販売されたようだ。この人形もまた各地へと運ばれ愛されていくのだろう。

山本の切り株を辿ると左手に麥生田兵吾による《磊磊》が並ぶ。八瀬の山を登りながら気になった石を撮影したという本作品群は、これまでののんびりとした八瀬の姿から一変、荒々しい石の表面と黒々とした木々の影のコントラストによって荘厳な雰囲気を醸し出している。先述したが、八瀬と信仰の歴史は古い。信仰と深い関わりをもつ八瀬のもう一つの顔がここに現れているようだ。

正面には不思議な造形のダンボール建築が現れる。『建築チーム』による石黒さんのスケッチをそのまま模型にした作品群だ。石黒さんは建築にまつわるスケッチを多く残していたのだという。八瀬陶窯を描いたものなのか架空の建築なのか判然としないそれらのパースは正直正確なものとはいえない。しかし『建築チーム』はそのスケッチが建築を「主観」で捉えた有機的な空間の現れと捉え、可変しやすいダンボールで実際に立ち上げることを試みた。窓の外の眩しい緑も相まって、少々歪んだ家の塀にやっと辿り着いたという親しみがあるし、開き過ぎた床の間もどこか凛とした心地よさがある。そういえば私たちが思い出す懐かしい建物も当時の印象によってチグハグとしたダンボール建築に似た姿かもしれない。奥には、八瀬の建築に惹かれた時代も違う様々な人々が調査した資料が並ぶ。本橋仁は『建築チーム』の総括として、「主観と主観とが交差し、相互に響き合うことで、八瀬という場は新たなかたちで立ち上がっていく。」と述べているが、本展もまた石黒宗麿という人物の視点・主観を軸として様々な主観が交差し、創作の根源となる八瀬を立ち上げていた。

ところで、展覧会タイトル「スケッチーズ」に使われている伸ばし棒（ー）は、実は通常より少し長めになっていることにお気づきだろうか。その絶妙な違和感には、「はい、チーズ」と笑顔で記念撮影をするような、親しみと軽やかさが込められている。実際、筆者も今年3月に恒例となっている八瀬陶窯での花見に参加し、満開の枝垂れ桜の下で集合写真を撮る機会を得た。石黒宗麿という陶芸家の存在を媒介に、普段交わることのなかった研究者やアーティストと地域住民が出会い、新たな研究のかたちがここから生まれようとしている。これからも増えていくだろう集合写真を想像しながら今後の八瀬に思いを馳せた。

三宅工芸㈱との共同研究

コーディネート── 福岡正蔵［伝統産業イノベーションセンター］

三宅工芸は和装花嫁衣裳（打掛）をこれまで1万着以上制作しており、その過程で培った金彩工芸は高く評価され、多くの芸能人の打掛を手掛けた他、2020年にはイギリス王室への献上品を制作しています。京友禅の技法のほか金彩・螺鈿の装飾を布などに定着させるという三宅工芸の独自の技術をさらに活かすため、2024年5月、京都精華大学と共同研究契約を締結しました。京都精華大学のファッションデザインに係る知見と制作力を掛け合わせ、伝統工芸が現代のライフスタイルと融合した新しいカテゴリーの商品開発を志向しています。2025年度は「三宅工芸×京都精華」ブランドを立ち上げ、伝統工芸見本市への出展を通してマーケット調査等に取り組みました。2026年度は本共同研究を題材に授業化し、学生のデザイン力を活かした商品開発を進める予定です。中長期的な研究の成果としては、伝統産業の分業体制から脱却した独自のSPAを構築・モデル化し、京都の伝統産業を担う中小零細企業の雇用促進、世代交代を後押しできるような地域創生を目指しています。

三宅工芸
京都精華
MIYAKE CRAFT × KYOTO SEIKA

岩倉南小学校「工作部」

コーディネート── 福岡正藏［伝統産業イノベーションセンター］

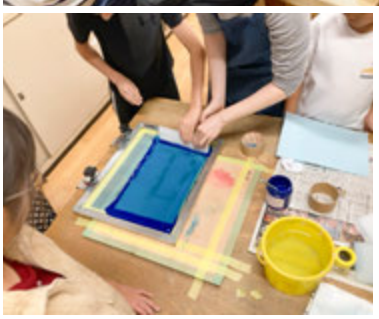
本学は2012年度より、京都市教育委員会と芸術系7大学等が構成する「京都芸術教育コンソーシアム（Art-e Kyoto）」に参加しています。京都ならではの芸術教育の確立と全市的な教育力の向上を目指して、京都の小中学校と芸術系大学が協同で取り組んでいます。

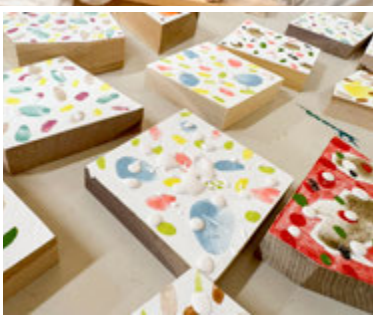
この活動の一環として今年度は、伝統産業イノベーションセンターが京都市立岩倉南小学校の「工作クラブ」の活動を支援しました。

同小のクラブ活動は必修で、4～6年生約400名が19のクラブに分かれて活動しています。そのうちのひとつ、工作クラブには児童32名が参加。本学専任教員2名のほか、非常勤教員6名（うち5名は卒業生）が講師を担当し、桶づくりの技術紹介やデザインの授業のほか、木工、陶芸、シルクスクリーン、日本画、工芸などの技法を用いて「伝統工芸」に触れるワークショップを開催しました。

スケジュール

1	5月19日	オリエンテーション	担当：福岡正藏
2	6月2日	日光写真ワークショップ	担当：溝縁真子（芸術学部版画専攻非常勤講師）
3	6月23日	桶をつくる人の話	担当：近藤太一（桶屋近藤、デザイン学部プロダクトデザイン学科非常勤講師）
4	9月8日	木工ワークショップ①	担当：葉山勉（デザイン学部建築学科教員）
5	9月29日	木工ワークショップ②	担当：葉山勉（デザイン学部建築学科教員）
6	10月20日	デザインワークショップ	担当：谷本尚子（デザイン学部共通教員）
7	10月27日	手びねりワークショップ	担当：田中大輝（芸術学部陶芸専攻非常勤講師）
8	11月17日	シルクスクリーンワークショップ	担当：小出麻代（芸術学部共通教育教育非常勤講師）
9	12月8日	日本画ワークショップ	担当：藤野裕美子（芸術学部日本画専攻教員）
10	1月26日	砂絵ワークショップ	担当：染谷聡（芸術学部共通教育教育非常勤講師）
11	2月2日	自分たちでテーマを決めてつくる①	
12	2月16日	自分たちでテーマを決めてつくる②	



2026
2026


センターの活動

講師担当

「石黒宗麿の工房から見えてきた世界」

日時：2025年9月20日（土）会場：コンソーシアム京都 登壇：中村裕太、米原有二

京カレッジ2025年度 生涯学習講座 大学リレー講座「もっと大学の講座を体験しよう」にて講師を担当し、八瀬陶窯に遺された陶片や石黒宗麿が書き留めたスケッチを手がかりに、石黒の八瀬での作陶風景についてお話しました。

新聞掲載

展覧会「スケッチーズ｜八瀬の石黒さん家から見た世界」が以下の媒体で紹介されました。

京都新聞｜7月10日朝刊｜**「人間国宝が八瀬で見たものは」**｜執筆者：樺山聡（記者）

京都新聞｜7月26日朝刊｜**ギャラリー「石黒宗麿の創作と八瀬の関係に迫る」**｜執筆者：はがみちこ（アートメディエーター）

刊行物

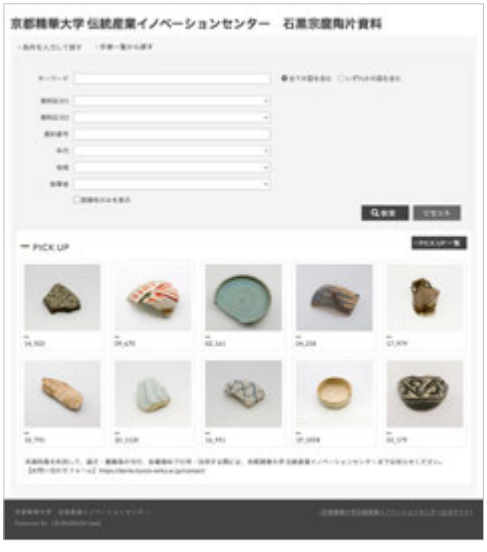
記録集『スケッチーズ｜八瀬の石黒さん家から見た世界』

発行：2026年3月
編集：齋藤雅宏、中村裕太、小出麻代
編集補：伊藤まゆみ、村田のぞみ
デザイン：仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura）

データベース

石黒宗麿陶片資料集

陶芸家、石黒宗麿が自宅兼工房跡「八瀬陶窯」に遺した陶片約1,100点を整理、分類して公開。石黒の作陶における試行錯誤を知る資料として陶片調査を継続している。



出雲初瀬
奈良県桜井市
小幡
滋賀県東近江市

Researchers and Staff Member, Center for Innovation in Traditional Industries
伝統産業イノベーションセンター 学内センター員·職員

淡田 明美 Akemi Awada

京都精華大学美術学部 デザイン学科 ビジュアル·コミュニケーションデザイン専門分野卒業。自動車会社にて「CUBE」「MARCH」「TIIDA」などの内装カラー&マテリアルデザイン開発に携わる。退職後、フリーランスとして携帯電話や住宅の塗料開発に従事しながら、ルリュール（製本工芸）を学ぶ。現在、針畑生活資料研究会にてデザインの観点から、生活道具·食について調査·記録している。

石原 葉 Yo Ishihara

1988年宮城県生まれ、東京出身。2020年東北芸術工科大学博士後期課程修了。博士（芸術工学）。学生時代に東北各地をリサーチしながら共同制作を行う「東北画は可能か?」に参加していたことをきっかけに、他者を眼差す視線をテーマに絵画制作を行う。演劇集団「ゲッコーパレード」所属。主な展覧会として『Metalogue』（ギャラリー恵風／京都／2025）『7つの心象風景をめぐる』（京都精華大学 Terra-S／京都／2024）など。

セシル·ラリ Cecile Laly

フランス生まれ。パリ·ソルボンヌ大学美術史学院博士課程修了。2014年、ケ·ブランリ博物館の特別研究員として和凧コレクションについて調査し、和凧の研究を始める。その後、同テーマついて複数論文を発表。主な論文·書籍に「王子稲荷神社と装束稲荷神社の凧市と火伏凧 ―日本の凧文化を支えるイベント―」（2018年）、「Appropriation de l'espace terrien et aérien par les cerfs-volants」（2020年）、『Cerfs-volants du Japon』などがある。

谷本 尚子 Naoko Tanimoto

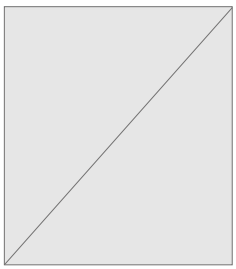
1962年生まれ。室町の呉服問屋で幼少期を過ごす。ウィーンの工芸デザイン、ロシアの近代デザインを研究テーマとした後、近年、京都の家具の歴史と現場の調査を行なっている。2021年から京都精華大学に所属し、伝統産業イノベーションセンターの活動に参加する。

中村 裕太 Yuta Nakamura

1983年東京生まれ、京都在住。2011年京都精華大学博士後期課程修了。博士（芸術）。京都精華大学芸術学部准教授。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。近年の展示に「第17回イスタンブール・ビエンナーレ」（バリン・ハン、2022年）、「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」（京都国立近代美術館、2022年）など。著書に『アウト・オブ・民藝｜ロマンチックなまなざし』（共著、誠光社、2022年）、『アウト・オブ・民藝』（共著、誠光社、2019年）。

米原 有二 Yuji Yonehara

1977年京都府生まれ。京都を拠点に工芸を対象とした取材・執筆活動をおこなう。2018年に京都精華大学伝統産業イノベーションセンター長に着任。工芸を起点とした社会研究・教育に取り組む。おもな著書に『京都職人 ―匠のてのひら―』、『京都老舗 ―暖簾のこころ―』（ともに共著・水曜社）、『京職人ブルース』（京阪神エルマガジン社）、『近世の即位礼-東山天皇即位式模型でみる京職人の技術』（共著・青幻舎）など。



福岡 正藏 Shozo Fukuoka ［事務局］

小出 麻代 Mayo Koide ［研究コーディネーター］

美術家。2009年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程芸術専攻版画領域修了。作品制作を通して、大きな声で語られてきた「歴史」の中に埋もれる、個別具体的な要素の重なりを、特に人と場所との結びつきの観点から解きほぐすことに関心を持つ。主な展覧会に、個展「尼崎市文化未来奨励賞受賞記念展『声声が灯して The polyphony of our narratives』」（尼崎市総合文化センター旧結婚式場／兵庫／2023）。「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2015 枯木又プロジェクト」（旧中条小学校枯木又分校／新潟）など。2024年度より、伝統産業イノベーションセンター・研究コーディネーターをつとめる。

Kyoto Seika University International Partner Universities and Institutions
京都精華大学 協定校／機関

USA
- University of Michigan School of Art and Design
- Bard College
- Southern California Institute of Architecture (SCI-Arc)
- Cornell College
- Rhode Island School of Design (RISD)
- California College of the Arts
- The Cooper Union School of Art
- ArtCenter College of Design
- International English Language Institute Hunter College, City University of New York

Canada
- English Language Institute, University of British Columbia

Brazil
- Escola da Cidade Sao Paulo

UK
- University of the Arts London / Chelsea College of Arts
- University of the Arts London / Camberwell College of Arts
- The University of Edinburgh / Edinburgh College of Art
- The Glasgow School of Art

Italy
- Romualdo Del Bianco

the Netherlands
- HKU University of the Arts Utrecht
- Gerrit Rietveld Academie

Germany
- Braunschweig University of Art
- Kunsthochschule Kassel

Finland
- Aalto University (School of Arts & Design & Architecture)
- The Arts Academy at Turku University of Applied Sciences

France
- L'Ecole Nationale Superieure d'Architecture Paris-Malaquais
- L'Ecole de Design Nantes Atlantique
- Paris College of Art
- Ecole Speciale d'Architecture
- L'Ecole Nationale Superieure d'Art de Limoges
- Centre international d'études françaises (CIDEF) Université catholique de l'Ouest

Belgium
- Wallonie-Bruxelles International
- École Nationale Supérieure des Arts Visuels de La Cambre

Turkey
- Ibn Haldun University

India
- Indian Institute of Technology Bombay

Indonesia
- Maranatha Christian University

Korea
- Daegu University
- Hongik University

Thailand
- Chiang Mai University

Taiwan
- Providence University
- Taipei National University of the Arts
- National Museum of Taiwan History
- Soochow University

Hong Kong
- Chu Hai College of Higher Education

Vietnam
- Vietnam National University Hochiminh City / University of Social Sciences and Humanities
- Hue University of Sciences

Senegal
- Universite Cheikh Anta Diop de Dakar (UCAD)
- Université Gaston Berger

Nigeria
- Kwara State University

Cameroon
- Université de Maroua

Republic of Mali
- Institut des Sciences Humanities
- Conservatoire Des Arts Et Métiers Multimédia Balla Fasseké Kouyaté (CAMM-BFK)

Burkina Faso
- Université Joseph Ki-Zerbo

Australia
- The Australian National University School of Art & Design

New Zealand
- AUT International House, Auckland University of Technology

Japan
- International Research Center for Japanese Studies
- Research Institute of Humanities and Nature
- Okinawa University
- Sapporo University
- The Faculty of Law and Economics, Okinawa University
- The Faculty of Foreign Languages, Sapporo University
- Kyoto University
- Kyoto city Zoo
- Kyoto Prefecture
- Nagahama city
- Tadotsu town
- Seika town
- Sakyo ward, Kyoto city
- Eizan Electric Railway Co.,Ltd.
- KYOTOGRAPHIE
- The Embassy Of The Republic Of Benin

Email dento2@kyoto-seika.ac.jp
Website https://dento.kyoto-seika.ac.jp/
Instagram/Twitter @seika_craft

Center for Innovation in Traditional Industries Partner Insitutions

京都伝統産業ミュージアム
Kyoto Museum of Crafts and Design

LECOLE DES HAUTES ETUDES EN SCIENCES SOCIALES

cnrs

Centre Norbert Elias UMR 8562

International Institute for Asian Studies

KYOTO CRAFTS MAGAZINE

國立臺北藝術大學
Taipei National University of the Arts

京都精華大学
伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック2025

Center for Innovation in Traditional Industries
Yearbook 2025
Kyoto Seika University

発行日｜2026年3月31日

監修｜米原有二
編集｜小出麻代
写真撮影｜麥生田兵吾
（表紙、p.5、p.7、p.18-19、p.24-P.29、p.34-36、pp.38-41、pp.45-47、p.53、裏表紙）
デザイン｜川越健太

発行｜京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137

©2026, 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター